

永平寺門前：秋葉大権現の概要

秋葉権現堂は永平寺近くの山腹にある小さなお堂である。年に 2 回、地元の人たちが集まり、火災やその他の災害から身を守るため参拝する。お堂はもともと 1816 年に建設され、最近では 1971 年に再建された。

歴史的に、日本の建物のほとんどは木造で、隣同士比較的近くに建てられていたため、火災は多くの地域社会にとって大きな脅威であった。永平寺自体は、その歴史を通じて数度にわたって、部分的に、または完全に焼失したことがある。最近の災害は 1879 年に発生したが、それ以前は、寺院の設立以来、各世紀に少なくとも 1 回の大火事が発生していた。永平寺は三方を山に囲まれているため、寺院で発生した火災は容易に谷を下って近隣に広がった。将来、大災害から地域社会を守るために、僧侶たちは毎年年初めに各家庭に秋葉山の火防のお札を配っている。

祀られている神様は神道の神様で、火之迦具土神（ヒノカグツチノカミ）と呼ばれ、火を司り、日本の最古の記紀に登場する。火之迦具土神は仏教での名前は「秋葉大権現」として知られており、地元では「秋葉さん」として知られている。神仏習合は、明治政府が仏教と神道の明確な分離を命じた明治時代（1868–1912）まで一般的であった。